

# Annual

B u l l e t i n

東海大学文明研究所所報 2022

# Report

# 2022

# 文明研究所での活動

## 田中 彰吾

文明研究所長  
文化社会学部教授

2022年度から文明研究所所長を新たに担当しております。ふり返ると、研究所の仕事に携わるようになってそれなりに長い時間が過ぎたことに改めて気づきます。2014年度に沓澤宣賢先生（当時総合教育センター教授、現在本学名誉教授）が所長として新たに着任され、当時同じ総合教育センターで仕事をしていたことがきっかけで所員としてお声がけいただいたのが始まりです。

当時は、2011年の東日本大震災からの復興過程を文明論的に考察する研究プロジェクトが継続されており、私はコアプロジェクト3「震災復興と文明（第2期）」をリーダーとして引き継ぐ形での参加となりました。「身体性の哲学」という私自身の専門性からどのように震災と文明にアプローチできるのか、担当した当初はしばらく悩んだのですが、復興しつつある東北の景観（ランドスケープ）に焦点を当てることで悩みは払拭されました。

人間の身体は、さまざまな活動を通じて周囲の環境と相互作用を繰り返しながら、独特の景観を生み出します。人間と環境との相互作用の歴史が、地理的に結実すると景観になるのです。東北地方には伝統的に、入り組んだ海岸線に沿って点在する美しい漁村が数多く見られます。これは、漁を生業とする地元の人々の活動が持続することで生み出された美に他なりません。

ところが、震災後の復興政策では沿岸部各地に巨大な防潮堤を建設する計画が進行していました。もちろん将来の津波を予防できるに越したことはないのですが、建設方式を工夫しなければ、結果的に海と人々の関係が根本から変わってしまい、長期的には東北の景観を一変させるだろうということが調査の過程で予見されました。復興をめぐる文明論的な危機感を、当時執筆した論文「復興のランドスケープ——東日本大震災後の防潮堤建設を再考する」（『文明』No.20所収）で表明しました。

このプロジェクトの終了後、2016年度～2018年度は「超領域人文学の構築に向けた基礎研究」、2019年度からは「人文学の方法論に関する総合的研究」の研究活動に参加してきました。いずれも、文明研究所における研究活動の基幹をなすコアプロジェクトです。両プロジェクトを通じて力を入れてきたのは、ヨーロッパ学術センターと共同で開催してきた国際シンポジウム「Dialogue between Civilizations (文明間対話)」です。

これは、東海大学が2014年度からの中期目標として「国際的レベルでの研究拠点の確立」を掲げていたことを受けて始まったものでした。ヨーロッパに研究・教育施設を持つ本学の強みを活かし、ヨーロッパ各地の研究者に学術センターまで講演者として来訪していただき、本学の研究者、大学院生も交えて文明をめぐる学際的な研究発表と議論を行う本格的な学術シンポジウムです。現在はパンデミックの影響で中断されていますが、すでに4回の開催を重ねており、東西の文化と思想、環境問題と文明、文明の根底にある人間観をめぐる、分厚い議論を行ってきました。これらの議論は、研究所の機関誌『文明』に掲載されている英語論文や、欧文誌の特集号（Special Issue）を通じてご覧いただくことができます。

冒頭で述べた通り、今年度より、前任の山本和重先生から所長職を引き継ぎました。山本所長の時代から、文明研究所では「人文学の活性化」と「本学所蔵の文化財活用」を二つの柱として研究活動を展開しています。この基本方針に変更はありませんが、敢えて付け加えるならば、学際性と国際性という特色を研究所の活動に今まで以上に積極的に取り入れたいと考えております。多士済々の所員・研究員と共に尽力してまいります。文明研究所の活動にどうぞご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

## 文明研究所の研究プログラム

文明研究所は、本学の創設者松前重義博士の意思を受け継ぎ、学内の幅広い分野からの研究者を結集して、過去の文明、現代文明が抱える諸問題、将来の文明のあり方について総合的に研究する機関です。

当研究所の発足は1959年に遡ります。研究所規則第2条に、「研究所は人類文明という包括的事実を、人文、社会、自然諸科学の協力によって探究し、文明学という新しい学問的理想を完成発展させることを目的とする」と記されている通り、遠大な構想のもとに設立されました。

世紀が変わって2001年には現在の文明研究所に近い形態となり、これ以降「21世紀文明の創出」という研究テーマのもと、2013年度まで、おおよそ3年を1期とする研究プロジェクトを策定し、研究を推進してきました。第1期(2001年度～2004年度)は「現代文明の展開と社会文化的多様性」、第2期(2005年度～2007年度)は「グローバリゼーションと生活世界の変容に関する総合的研究」、第3期(2008年度～2010年度)は「対話と共生を理念とする新しい社会の構築」、第4期(2011年度～2013年度)は「創造すべき21世紀文明」でした。2014年度からは、本学の第II期中期目標(2014年度～2017年度)を受けて、「文明とグローバリゼーション」をテーマとして掲げ、共同研究を進めました。

2016年4月には、総合社会科学研究所の設置にともない、人文学を中心として本研究所の研究活動を進めていくことになりました。「人文学の活性化」と「本学所蔵の文明遺産の活用」を2つの柱として、共同研究を推進しています。前者はこの間、「超領域人文学構築に向けた基礎研究」と「20世紀人文学の方法論的再検討」の2つのコアプロジェクトを実施してきましたが、2019年度からは両者を統合して、コア・プロジェクト「人文学の方法論に関する総合的研究」として研究活動を展開しています。後者では、コア・プロジェクト「東海大学所蔵文化財の活用のための基盤整備II」において、本学が所蔵する「アンデス先史文明に関する遺物」(アンデス・コレクション)と「古代エジプト及び中近東コレクション」(AENET)の保管・整理を行うとともに、本学のマイクロ・ナノ研究開発センターとの連携研究や、展示会の開催などを行っています。

2022年度は、コア・プロジェクトと個別プロジェクトを以下の通り推進しています。進捗状況については本誌の報告概要をご覧ください。

- コア・プロジェクト①「人文学の方法論に関する総合的研究」(代表：山本和重)
- コア・プロジェクト②「東海大学所蔵文化財の活用のための基盤整備II」(代表：山花京子)
- 個別プロジェクト①「美人画に関する基礎的研究」(代表：篠原聡)
- 個別プロジェクト②「近現代芸能文化史に関する研究」(代表：馬場弘臣)
- 個別プロジェクト③「ヒトの認知進化から文明の発生過程を読み解く」(代表：田中彰吾)

## 2022 年度の研究プロジェクト

### 「人文学の方法論に関する総合的研究」 (コア・プロジェクト 1)

本研究所の柱の一つである人文学の活性化について、2018年度まで実施してきた「超領域人文学(Trans-Disciplinary Humanities)構築に向けた基礎研究」と「20世紀人文学の方法論的再検討」の2つのコア・プロジェクトを、2019年度からは「人文学の方法論に関する総合的研究」として統合し、両者の研究交流をはかりつつ研究活動を進めてきた。本年度は、これまで「超領域人文学構築に向けた基礎研究」班と合同研究会を実施してきた個別プロジェクト「人間営為と環境の関係性—人文学・社会学の視点から」を統合し、より総合的横断的な観点から人文学の活性化をはかるとともに、従来と同様、大学院の研究・教育と結合して活動を展開した。

### 「超領域人文学(Trans-Disciplinary Humanities) 構築に向けた基礎研究」班 平野葉一・田中彰吾・吉田欣吾 中嶋卓雄・平木隆之・吉田晃章 服部泰・李昭知・安達未菜

本研究では、2021年度までの「超領域人文学研究」を推進すると同時に、その一環として「環境に関わる研究」(COVID-19対応も含む)を含めて研究会を開始した。また、その成果報告として、国際会議 ICICIC2022 での口頭発表および論文投稿、比較文明学をはじめとする国内学会での研究報告および論文投稿を進めた。なお、研究会としては、内部の研究員を中心とするゼミ形式の研究會「超領域人文学研究会」(3回開催)およびある程度の外部にも公開して実施する「人間と環境研究会」(2回開催)を開催した(概要は以下を参照)。

#### (1)「超領域人文学研究会」

8月31日

報告者:中村朋子(本学前教員)、二重作昌満(研究生)、鷹取勇希(東洋大)、マナシジャー・ペグサム(大学院生)

11月12日

報告者:渡辺青(本学前教員)、平野葉一(文明研究所)

2023年3月16日

報告者:中嶋卓雄(STEM教育センター)

#### (2)「人間と環境研究会」

9月7日

報告者:中嶋卓雄(STEM教育センター)、平野葉一(文明研究所)

12月17日

報告者:服部泰(観光学部)、中嶋卓雄(STEM教育センター)

これらの研究会では、現代文明に関する各報告者の専門分野からの問題提起に対し、多様な専門分野からの質疑応答を経て学際的視点からの検討を行い、文明研究の複層性について今後の研究の可能性を探った。とくに、喫緊の課題である環境問題とQOLに関する議論では、地域における個々の人々の環境意識をグローバルな視点で活性化させる方向性などが検討された。なお、本研究会での主な成果は、以下のとおりである。

#### 国際会議 ICICIC2022

口頭発表:中嶋卓雄、李昭知、平野葉一、吉田欣吾、服部泰、安達未菜、鷹取勇希、二重作昌満、マナシジャー・ペグサムの6報(2報を論文投稿中)

#### 比較文明学会

口頭発表:平野葉一(中村朋子と共著)、安達未菜の2報

#### 数学教育学会

口頭発表:平野葉一(中村朋子と共著)の1報(論文投稿中)

### 「20世紀人文学の方法論的再検討」班

山本和重・馬場弘臣・村田憲郎  
川崎亜紀子・篠原聡・齊藤仁一朗

本研究計画の目的は、人文学に対する社会的評価が低下するなかで、その活性化のために、20世紀人文学の方法論を歴史的な視点からふりかえり、21世紀に継承すべき方法をさぐることにあり、2016年度から、外部からの講師の招聘を含め、計12回の研究会を開催した。研究会活動のなかで、得られた認識は下記のようなものである。

「20世紀における人文学の特徴として、19世紀的な工業化型近代化や技術万能主義に照応した科

学主義的人文学に対する反省がある。啓蒙的理性や分析重視の方法に対して、感性・身体性（身体知）あるいは総合性ということが強調され、哲学、歴史学、教育学などさまざまな領域において、そうした動きがみられる。しかしながら、そうした反省が学問領域を超えて共有されておらず、また、一つの学問領域においても、そうした発想・研究は間歇的にみえる。他方、21世紀の今日、身体性への着目は学問研究の領域にとどまらない。教育の分野ではアクティブラーニングが重視され、経済界や学習科学等の領域からも身体性を意識した学びの有用性が着目される中、その問題点も顕在化しつつある。”

以上のような認識をふまえ、実践的な領域における身体性をめぐる動向との関連についても視野にいれつつ、20世紀における身体性をめぐる研究の視点・方法の学問分野単位での自覚的継承と、学問領域を超えた問題意識の共有をめざし、研究活動の総括として、2023年3月20日（月）に、東海大学湘南校舎14号館103教室で下記の公開シンポジウムを開催した。

シンポジウム「人文学における身体性をめぐって」

報告：

山本和重「歴史学における身体性重視の系譜—柳田史学・国民的歴史学・社会史研究・オーラルヒストリー—」

田中彰吾「認知科学における身体性—これまでとこれから—」

齊藤仁一朗「模擬授業場面における身体知と理論的理解の関わり—「リフレクション」概念に注目して—」

ディスカッション：

報告者をパネリストとして、篠原聰の司会で実施

## 「東海大学所蔵文化財の活用のための

### 基盤整備Ⅱ」

#### （コア・プロジェクト2）

山花京子・吉田晃章・篠原聰  
田口かおり・竹野内恵太

本プロジェクトは11号館に収蔵されている古代エジプト及び中近東コレクション（AENET）（以下、エジプト・コレクションとする）と5号館1

階に収蔵されているアンデス・コレクションの活用に関わる環境整備と保全を主たる目的とする。さらに、これらのコレクションを軸に教育普及活動、研究会や講演、シンポジウム等を展開している。

以下では、1). アンデス・コレクションと、2). エジプト・コレクションについてそれぞれの成果を記す。

#### 1). アンデス・コレクション

\* 2022年度新学術領域研究「出ユーラシアの統合的人類史学：文明創出メカニズムの解明」A02班 心・身体・社会をつなぐアート公募研究「笛吹きボトルの構造研究と音響解析から探る古代アンデスの水に関わる世界観」（代表者：吉田晃章、課題番号：22H04453）採択（2023年度まで2か年）

\* 文明研究所協力のもと、前年度より2022年4月30日まで松前記念館「水、呼吸、いのちのかたち」展にアンデス・コレクションを出陳。平塚盲学校児童・生徒の作品（笛吹きボトル）を展示。

\* 4月から科研プロジェクト代表吉田晃章が、研究協力者の放送大学鶴見英成准教授・岡山県立大学真世土マウ准教授、BIZEN中南米美術館森下矢須之館長、マイクロ・ナノ研究開発センター喜多理王所長、イメージング研究センター栗野若枝氏に加え、田島製作所田島陽志氏とともにアンデス・コレクション内の笛吹きボトルを対象に、研究を開始。50点の笛吹きボトルを確認し、X線CT撮影を実施した。

\* 6月6日に神奈川県立伊勢原養護学校伊志田分教室で実施された「笛吹きボトルワークショップ」（科研費プロジェクトのアウトリーチ活動）に、アンデス・コレクションを触察資料として提供。計3回のワークショップを実施した。

\* 6月25日、卒業生の田牧陽一氏からアンデスの布製品5点を受贈。これに対し山田清志学長からの礼状をお渡しした。遺物は、10月に3点を放射性炭素年代測定にかけ、11月に年代が判明した。いずれもインカ期以前の考古遺物であった。

\* 10月には、アンデス・コレクションHPの第5回更新で、収蔵品100点をアップロードし、総掲載点数が500点を超えた。

- \* 吉田の担当する授業「文明論の展開（アンデス地域の諸文明）」（秋 Semester）で、笛吹きボトルを活用し、調査実習を行った。
- \* 11月1日から松前記念館リニューアル企画展



東海大学松前記念館リニューアルオープン第1回企画展 | 東海大学アンデスコレクション文理融合研究成果報告

古代アンデスの

# 音とカタチ

— 先端科学で解き明かす東海大学コレクション —

2022年 11月1日(火) ~ 2023年 3月31日(金)

会場 湘南キャンパス松前記念館 (歴史と未来の博物館) 〒平塚市北金目4丁目1番1号

入場無料



古代アンデスめ

# 音とカタチ

— 先端科学で解き明かす東海大学コレクション —



科研費

本学が誇る先端科学が解き明かす古代アンデスの「音とカタチ」。最先端科学で、最先端の最先端科学が解き明かす古代アンデスの「音とカタチ」。最先端科学で、最先端の最先端科学が解き明かす古代アンデスの「音とカタチ」。

本館は、最先端科学で、最先端の最先端科学が解き明かす古代アンデスの「音とカタチ」。

本館は、最先端科学で、最先端の最先端科学が解き明かす古代アンデスの「音とカタチ」。

- 1. 展示 最先端科学で解き明かす古代アンデスの「音とカタチ」
- 2. 展示 最先端科学で解き明かす古代アンデスの「音とカタチ」
- 3. 展示 最先端科学で解き明かす古代アンデスの「音とカタチ」
- 4. 展示 最先端科学で解き明かす古代アンデスの「音とカタチ」
- 5. 展示 最先端科学で解き明かす古代アンデスの「音とカタチ」
- 6. 展示 最先端科学で解き明かす古代アンデスの「音とカタチ」
- 7. 展示 最先端科学で解き明かす古代アンデスの「音とカタチ」
- 8. 展示 最先端科学で解き明かす古代アンデスの「音とカタチ」
- 9. 展示 最先端科学で解き明かす古代アンデスの「音とカタチ」
- 10. 展示 最先端科学で解き明かす古代アンデスの「音とカタチ」

東海大学アンデスコレクションウェブサイト公開中です。

<http://www.tokai.ac.jp/andean>

コレクションの魅力を学ぶための資料を公開中。

資料の公開に丁寧なサポートもご用意しております。

※資料の公開は、2023年3月31日までです。

お問い合わせ先：国際教育センター 結城健太郎(yuki.ken@tokai.ac.jp)

「古代アンデスの音とカタチ」を開催。文明研究所共催事業。先端技術で解明されてきたアンデス・コレクションに関する次の展示を行った。1) 真世土准教授らの協力のもと笛吹きボトルの研究成果を展示、2) 市木尚利研究員（立命館大学）らの協力のもとワウラ様式土器の圧痕レプリカ研究について展示、3) 江田真毅教授（北海道大学）協力のもとナスカの骨製縦笛についての研究を展示、4) 山花京子教授、秋山泰伸教授協力のもとアンデス・コレクションのガラス玉についての研究を展示、5) 喜多理王教授協力のもとナスカ文化のパンパイプの音響解析に関する研究を展示、6) 受贈した布製品5点を展示、7) 松前ひろみ助教、今西規教授協力のもとアンデス・コレクションの3D Digitization 研究を展示、8) ワークショップで制作した笛吹きボトルの展示を実施した。

\* 11月27日に静岡県ヴァンジ彫刻庭園美術館において開催されたユニバーサル・ミュージアム研究会でアンデス・コレクションの「笛吹きボトル」を展示し、研究発表を実施した。

\* 東海大学第4回スペイン・ラテンアメリカウィーク講演会「古代アンデスの音とカタチ」

第4回スペイン・ラテンアメリカウィーク講演会

おい!!

なーに?!

# 古代アンデスの音とカタチ

2022年 12月8日(木)

09:00~

Zoomにて

スペイン語科目履修者以外でこの講演会に参加されたい場合は、問い合わせ先までお知らせください。Zoomの接続情報をお知らせします。

文学部文明学科 吉田 晃章 先生

問合せ：国際教育センター 結城健太郎(yuki.ken@tokai.ac.jp)

南米の古代アンデス文明の起源は今から4500年以前に遡ることが出来ます。今では旧大陸の文明と同じほど古い文明であることが分かっています。その文明では、水を入れると音の鳴る土器、「笛吹きボトル」が長い間制作されました。南米ペルーでは文化は異なっても、紀元前1000年頃からインカ帝国が栄える紀元後1500年頃まで、約2500年の間制作され続けています。なぜ彼らは音にこだわったのでしょうか。謎の解明に向けた、歴史研究ではあまり顧みられなかった音の研究について取り上げたいと思います。なお、講演タイトルと同名の展示企画が学内松前記念館で行われていますので、展示遺物の解説も行います。ご期待ください。

同企画展に関連するオンライン講演、国際教育センター主催、12月8日。

- \*銀座ギャラリー青羅にて「触れるアート」展を開催。文明研究所共催（2023年1月22日～2月4日）。古代アンデスの笛吹きボトルの紹介と、ワークショップで筑波大学附属視覚特別支援学校児童によって制作された笛吹きボトルを展示。



2023. 1.22(日) - 2.4(土) | 美術館ギャラリー青羅 | 水曜休館 | 平日 11:00 - 17:00 (土日は19時まで) | 初日 13:00 から・最終日16:30 まで  
主催 筑波大学 [TAMP: つくばアートメダルプロジェクト]  
共催 筑波大学松前記念館・文明研究所、株式会社美術館ギャラリー青羅  
後援 一般社団法人 FIDEM JAPAN [FIDEM: 国際美術メダル連盟]  
協力 高谷美術株式会社、株式会社日本金属工業研究所、  
ともいきアートサポート事業(神奈川県)、東京福祉大学芸術研究室

- \* 3月、アンデス・コレクション HP の第 6 回更新で、收藏品 100 点をアップロードし、総掲載点数が 600 点に達した。(予定)

## 2). エジプト・コレクション

- \*エジプト・コレクションの HP

<http://aenet.civilization.u-tokai.ac.jp/>

コンテンツの追加、ブログ「スズキさん」シリーズと「大学院での学び」連載中

ユーザー分析 (by Google Analytics)(期間 2022 年 2 月 8 日～2023 年 2 月 8 日)

サイト開設以来 1 年でユーザー数 1794 件となり、日本だけではなく、海外の国々からもサイトが閲覧されていることがわかる。今後はサイトのデータアップロード数拡充と英文解説拡充を図る。



- \* SNS を利用したコレクション情報普及  
受験生など若年層にアウトリーチを行うため、アジア学科「アジア研究プロジェクト A」科目の履修学生が AENET コレクションの紹介動画を制作

- ①. 【検証】 ミミズク型護符を持って生活してみた  
<https://youtu.be/HkHaypAqa-M>
- ②. 解説 テトラドラクマ銀貨とは  
<https://youtu.be/fewlZpprBKQ>
- ③. コプト布 現代ファッションに取り入れる?!  
<https://youtu.be/UEYaLTXLxpQ>

Twitter 開設

AENET (@aenet\_tokai) / Twitter

チャレンジプロジェクトの学生団体「Egyptian Project」が毎週月・木の 5 限に AENET コレクションの遺物整理と古代エジプト語の勉強会を開催。各活動の動画を作成し、YouTube にアップロードしている。

- ①. エジプロ エクセル講習を受ける!  
<https://youtu.be/ZWAX-uWn9Z4>
- ②. エジプロ 遺物「洗い」を学ぶ!  
[https://youtu.be/8pZIRc9\\_acU](https://youtu.be/8pZIRc9_acU)
- ③. エジプロ 注記を学ぶ!  
<https://youtu.be/ol0DdeJWF8o>

- \*研究会・講演会・ワークショップ  
企画 1

「文化財の三次元計測ワークショップ スマホと PC で文化財の 3D モデルを構築」(文明研究所・MNTC 共催) を開催。

考古学において、立体的な遺構や遺物を平面

図に落とし込むために「実測」という方法が伝統的に用いられてきたが、本ワークショップでは新たな実測方法としてランダムに撮影した遺物写真を専用のソフトウェアを使いパソコン上で三次元画像に変換する方法や、iPhone や iPad に標準装備されている LiDAR 機能を使い三次元画像に変換する方法を学んだ。対象の遺物には AENET コレクションの鉢や石斧、壺や石製錘などが使われた。

講師 野口淳（東海大学文化社会学部アジア学科非常勤講師・金沢大学古代文明・文化資源学研究所客員講師）

日時：12月3日（土曜日）10：00～16：00  
東海大学ニュース：「文化財の三次元計測ワークショップ スマホとPCで文化財の3Dモデルを構築」を開催しました | キャンパスニュース | 東海大学 - Tokai University (u-tokai.ac.jp)

#### 企画2

「アンデス先史文明の謎のガラス?? “アンデス玉”を再現しよう」(文明研究所・工学部応用化学科秋山研究室) (協賛「国際ガラス年2022」日本実行委員会) を開催。

本学アンデス・コレクション所蔵にはガラスが使われたネックレスが3連ある。その中でガラス玉の紐通し穴部分に赤色が付着している通称「アンデス玉」には酸を使って芯を溶かす特殊な制作方法が用いられていた。本イベントではアンデスにおけるガラス玉の意味とその歴史的背景を説明したのち、実際の制作体験を行った。

講師 秋山泰伸（工学部応用化学科教授）  
山花京子（文化社会学部アジア学科教授）

日時：12月24日（土曜日）13：30～15：00  
国際ガラス年2022 イベントレポート：「アンデス先史文明の謎のガラス?? “アンデス玉”を再現しよう!!」東海大学湘南校舎 - 国際ガラス年2022 (iyog2022.jp)  
東海大学ニュース：「アンデス先史文明の謎のガラス?? “アンデス玉”を再現しよう」を開催しました | キャンパスニュース | 東海大学 - Tokai University (u-tokai.ac.jp)

#### 企画3

「デジタル・ヒューマニティーズ 画像公開方式 III F や AI くずし字認識の発展から見えてくる人文学の新たな研究方法」(文明研究所・

MNTC・JST 創発的研究支援事業共催) を開催。

近年 AI を人文学に応用することで DH (デジタル・ヒューマニティーズ) という新たな研究分野が創出されている。AI の人文学への適用はこれまで個人の研究者が成しえなかった膨大なボリュームのデータを多くの人々が活用できるようになった。本講演では、崩し字認識アプリ「みを」や「顔貌コレクション (通称「顔コレ」) の開発に携わった北本朝展教授から DH の現状と展望について説明があり、その後参加者による活発な議論が行われた。

講師 北本朝展 (ROIS-DS 人文学オープンデータ共同利用センター センター長)  
ディスカッサント：

松前ひろみ (東海大学 医学部医学科 助教)  
専門：バイオインフォマティクス、人類進化における生物学のおよび文化的特徴の研究

ディスカッサント：

山花京子 (東海大学 文化社会学部アジア学科教授) 専門：エジプト考古学、ファイアンスを中心とした古代の工芸技術復元の研究

日時 2023年1月31日 (火曜日) 13：30～16：00  
東海大学ニュース：「文化財を科学する III ワークショップ『AI とオープンデータが人文学を変える』」を開催しました | キャンパスニュース | 東海大学 - Tokai University (u-tokai.ac.jp)

\*上記以外の出版・報道

世界遺産アカデミー

① .2022年6月『ヌビアの遺跡群：アブ・シンベルからフィラエまで』

<https://www.sekaken.jp/whinfo/monthwh/monthwh-w028/>

② .「Egyptian Project と HSCO スタッフが協働で本学所蔵文化財の保存活動を行いました」

東海大学 HP 機関ニュース Egyptian Project と HSCO スタッフが協働で本学所蔵文化財の保存活動を行いました | 機関ニュース | 東海大学 - Tokai University (u-tokai.ac.jp)



## 「美人画に関する基礎的研究」

### (個別プロジェクト①)

篠原聰・山本和重・角田拓朗  
今西彩子・田中知佐子・吉井大門

本研究は、「美人画」の確立に大きく寄与した鏑木清方とその弟子たちの画業を浮世絵の受容という観点から考察し、日本近代における「美人画」の諸相を明らかにすること、その過程で従来の「日本画」の成立に関する議論にも新たな研究視角を提供することを目的としている。本年度は新たに田中知佐子氏（大倉集古館主任学芸員）、吉井大門氏（横浜市歴史博物館学芸員）をメンバーに加え、1930年にイタリアで開催されたローマ日本美術展覧会に関する研究を軸に調査を進めた。コロナ禍ではあったが、概ね計画通りにプロジェクトを進め、目標を達成することができた。主な成果は以下の通りである。①イタリアの現地踏査（ローマ、2022年10月8～17日）、②国内における作品調査（横須賀美術館、京都国立近代美術館、静岡県立美術館、足立美術館、東京国立近代美術館、鎌倉大谷美術館）、③オンラインシンポジウム「美人画熟考」（女子美術大学美術館、2021年6月5日）の報告書の作成、④活動報告書の刊行。

本年度はイタリアの現地踏査により新出資料が発見されるなど、大きな進展があった。大倉集古館所蔵の資料については本年度に目録化がほぼ終了したので、今後は大倉集古館所蔵資料とイタリアで発見した新出資料を付け合わせ、ローマ日本美術展覧会の全容解明に取り組む予定である。本プロジェクトを進めるなかで、美術館学芸員や外

部研究者との交流も深まり、その関係で、プロジェクトメンバーは個別に2022年に東京と京都の国立近代美術館にて開催された「鏑木清方」展に協力し、展覧会レビューを執筆するなど、個々の研究成果の一端も様々な形で公開することに繋がった。尚、本年度の調査研究の成果については、次年度、東京文化財研究所主催の研究会にて、9月頃に研究発表を行う予定であり、今後も美術館等との連携による調査研究の拡がり期待できる。他方、資料の基礎調査については博物館実習生が関与し、実物資料の取り扱い等を体験的に学ぶ絶好の機会ともなるなど、教育的な効果も見込めるため、次年度以降も継続的な調査研究が求められる。

## 「近現代芸能文化史に関する研究」

### (個別プロジェクト②)

馬場弘臣・兼平賢治・木村政樹・神谷大介

本年度は、大学院文学研究科2名、歴史学科日本史専攻4年生1名および一般人の4名を臨時職員として雇用し、主に緒形拳氏の資料整理作業にあたった。新型コロナウイルス（COVID-19）の流行もかなりおさまったことで、本年度は資料整理作業を大幅に進めることができた。台本、パンフレットについては再整理を終え、新たに写真、スクラップブック、通信（書簡・葉書等）、自筆書画についてもほぼ整理を終えることができた。このうち、台本とスクラップブックの資料目録を『文明』No.30に掲載した。まだ、チラシとポスターの入力作業が残っているが、これらの目録についても順次公開していきたいと考えている。



作品調査（パチカン美術館収蔵庫にて）



資料整理作業風景

劇作家・北條秀司氏関係の資料については、文学部歴史学科日本史専攻開講のウィンターセッション科目「史料管理学演習」の受講生と臨時職員と共同で、台本とポスターの整理を進めた。特にポスターについては、自身が脚本を提供した新国劇、新派、舞踊劇、歌舞伎等だけではなく、明治期からのポスターを収集していたことがわかり、明治・大正・昭和・平成の各年代における演劇のポスターを通覧することができることがわかった。

近現代芸能史に関する資料整理の過程については、アーカイブ学の一環として論文化していくことが重要であると考え。また、本年度はこうした活動に対する啓蒙として、10月8日(土)と11月5日(土)の両日、一般の方を募集し(10名限定)、資料整理を体験してもらう試み「緒形拳・アーカイブカフェ」を開催した。

## 「ヒトの認知進化から

### 文明の発生過程を読み解く」 (個別プロジェクト③)

田中彰吾・松本俊吉・入来篤史  
鈴木宏昭・Yochai Ataria・Denis Francesconi

本プロジェクトは、ヒトの認知能力の進化に焦点を当てることで、文明の発生過程を新たに読み解こうとするものである。ヒトの進化には神経生物学的に見て、「サピエント・パラドックス」と称される難問が存在する。ヒトの脳は約200万年前、ホモ・ハビリスが道具使用を開始して以降きわめて急速にその容量を拡大し、約20万年前のネアンデルタール人の段階ですでに現生人類(サピエンス)と同水準の約1500mlに達している。この間、脳の拡大、道具使用と生活様式の変化、認知の発達とは相互に関連しつつ進化している。ところが、狩猟採集から農耕・牧畜へと生活形態を変化させ、定住型の文明形成が始まったのは約1万2千年前で、ホモ・サピエンスのみがこれに成功した。ここでは、脳の拡大が単純に生活様式の変化と認知発達に結びつかない謎がある。そこで本研究では、文明発生の過程に伴う生活形態の変化、特に身体性に基礎を持つ環境との相互作用の変化が、どのように認知進化や脳の質的变化と相関していたのかを明らかにし、サピエント・パ

ラドックスの解明に資する仮説を提示することを目標とする。

2022年度に新たに開始したプロジェクトであり、論文として公開できるだけの成果はまだ上げられていないが、学内外で研究会を3回開催した他、メンバーによる関連イベントとして、ヨーロッパ学術センターと共催で以下の国際オンライン・シンポジウムを開催した。また、サピエント・パラドックスをめぐる理論的考察について、代表者の田中が国際会議で講演を実施した。詳細は以下の通りである。

\* 2022年9月23日, Tokai University Online Symposium: "Embodied Spirituality: Meditation practices in the contemporary world" (Speakers: Shogo Tanaka, Denis Francesconi, Jihe Hsieh)



\* 2022年11月9日, Shogo Tanaka 「Embodied Cognitive Evolution behind the "Sapient Paradox"」, International Conference on Embodied Cognitive Science (ECogS 2022), Okinawa Institute of Science and Technology

Conference and Workshop Section  
Theoretical Sciences Visiting Program  
International Conference on Embodied Cognitive Science (ECogS)  
2022



Date  
Monday, November 7, 2022 - 09:30 to Friday, November 11, 2022 - 17:00

## 活動報告

### 社会教育事業と地域連携 「大学コレクションの利活用」

吉田 晃章

2021年度は特別研究期間にあたり、前期にアンデス・コレクション研究を重点的に行い、科学研究費の調査作成にも十分な時間を取ることができた。その結果、学内外の研究協力者の御蔭もあり科学研究費（2022～23年度）を獲得することができた。「笛吹きボトルの構造研究と音響解析から探る古代アンデスの水に関わる世界観」というテーマで新学術領域研究（研究領域提案型）「ユーラシアの統合的人類史学：文明創出メカニズムの解明」のA02班（心・身体・社会をつなぐアート）公募研究として採択された。

研究対象の遺物は、東海大学文明研究所が所蔵するアンデス・コレクションであり、ペルーの笛吹きボトルのX線CT撮影を行い、欠陥解析などから成形と構造について研究を実施する。コレクションの総点数は1900点を超えるが、約1000点の土器から笛吹きボトルらしき土器を選定し、現在のところ50点の笛吹きボトルを確認している。さらにSTLデータから3Dレプリカの作成を行い、レプリカに水を入れて音を鳴らし、音の解析から文化ごとの、あるいはボトルのタイプごとに音の特徴を把握し、「聴覚」という観点から当時のアンデスの人々の音に対する趣向や心性に迫ろうとする斬新なプロジェクトである。また、陶土による制作実験を実施して、当時の陶工が重視していた制作のポイントなどについて実証的に研究していきたいと思っている。

2022年度は学術集会での発表はもちろんであるが、研究成果のアウトリーチ活動も積極的に行った。神奈川県「ともいきアート」プロジェクトとコラボレーションして、前期には地域の伊勢原養護学校石田分教室で笛吹きボトル制作ワークショップを実施した。また、後期には筑波大学附属視覚特別支援学校で「音の奏でる風景」と題し、同様のプロジェクトを実施した。これらのワークショップは、主に3部から構成されている。はじめにアンデス文明、考古学、大学コレクションについての講義を生徒・児童に聴いてもらい、遺物を触察し、オリジナルやレプリカの音を聞いて、

時間と空間を超えた異文化体験をしてもらう。続いて想像を膨らませてもらい、笛吹きボトルの制作を行う。さらに一定の期間を置き、最後に笛吹きボトルの焼成後に鑑賞と演奏を行い、活動をまとめるというものである。ここで重要になるのは、オリジナルの考古遺物の観察、触察である。かなりの緊張感を伴うが、十分な配慮をしたうえで実施しており、オリジナルの遺物が生徒・児童に与える教育的影響は計り知れない。また、制作過程を通じ、アンデスの人々がいかに笛吹きボトルと関わっていたのかを垣間見ることができ、ワークショップは音の認知という視点から研究にも一定の示唆を与えてくれるものとなった。そして生徒・児童の作品は、ギャラリーや博物館での展示をとおして社会の人々を魅了するという好循環が生まれている。

さらに、これまでのアンデス・コレクション研究に携わっている先生方と研究をまとめ、松前記念館リニューアル企画「古代アンデスの音とカタチ」展を建学80周年記念式典に合わせて開催することができた。今後も大学コレクションを利活用し、領域横断的研究はもちろんのこと、社会や地域との連携をはかり外部との有機的なネットワークを生み出しながら、コレクションのさらなる価値を創造していきたいと思っている。



筑波大附属視覚特別支援学校における  
笛吹きボトルワークショップでの制作風景

### 学部教育等との連携

### 「緒形拳・北條秀司資料と史料管理学演習」

馬場 弘臣

本年度は、大学院文学研究科2名、歴史学科日本史専攻4年生1名および一般人1名の計4名

を臨時職員として雇用し、緒形拳氏の資料整理作業にあたった。大学院生と学生は特に台本とスクラップブックの再整理および写真の整理作業に当たり、その一部を目録として公開できるまでには整理を進めることができた。このうち、台本とスクラップブックの資料目録を『文明』No.30に掲載した。

また、文学部歴史学科日本史専攻開講のウィナーセッション科目「史料管理学演習」は、今年も対面で実施することができたので（2022年2月21日～25日）、タイアップ授業の一環として、北條秀司関係資料の整理作業を実施した。具体的には、大学院生が作成したデータベースをもとに、臨時職員とも共同で、台本とポスターの整理を進め、ファイルに収納した。また、書簡についても一部整理を進めた。

緒形氏の資料については整理のメドが立ったものの、北條氏の資料は量も多く、質も多様であるため、まだまだ時間がかかる。次年度も大学院生・学部生を中心に資料整理を継続し、史料管理学演習の授業でも北條秀司—緒形拳資料を通じて、近現代の個人所蔵資料についての資料整理を学ぶ場を設けていければと考えている。



資料整理作業風景

## 『文明』第30・31号（2023年3月発刊）

### ■内容のご紹介 第30号

#### 巻頭言

- 平和への道—教育による人づくり

(篠原聡)

#### 論文

- バリ島における多文化共生社会を可能にする伝統の知恵 “Kearifan Lokal”  
(東海林恵子)

#### 翻訳

- 実存現象学的研究—心理学の代案としての「人間科学」  
スコット・D・チャーチル,  
エイミー・M・フィッシャー＝スミス  
(監訳：田中彰吾, 訳：村井尚子, 植田嘉好子, 奥井遼)

#### 資料目録

- 俳優・緒形拳関係資料目録 その1

(馬場弘臣)

### ■内容のご紹介 第31号

(欧文誌 Special Issue of New Cultural Environment:  
Remodeling New Forms of Cultural Environment after Coronavirus)

#### • Preface

(Yoichi HIRANO, Takuo NAKASHIMA, Shogo TANAKA)

#### I. Special Topics: Remodeling New Forms of Cultural Environment after Coronavirus

- Applying the SECI model to studies of the human awareness of natural and social environments: A perspective based on Polanyi's tacit knowledge  
(Takuo NAKASHIMA, Yoichi HIRANO and Mina ADACHI)
- A Survey of the Tourism-Related Awareness of Students During the COVID-19 Pandemic  
(Soji LEE)
- Existence and Activation of Tacit Knowledge in Tourism  
(Soji LEE and Takuo NAKASHIMA)

#### II. Special Topics: Perspective on Information-oriented Society

- Self-identity in a virtual space: Consideration from an embodied perspective  
(Mariia Shuvalova and Shogo Tanaka)

#### III. Trans-disciplinary Humanities

- A Remark on the Distance Between the Study on Trans-Disciplinary Humanities and Society—Focusing on Trends in the Humanities in Japan in the 1970s and the 1980s  
(Sei WATANABE)
- Remark on the Reform of Science (Mathematics) Education from STEM education to STEAM education  
(Yoichi HIRANO and Tomoko NAKAMURA)

## 所員の活動

### 田中 彰吾

文明研究所長、文化社会部・教授

#### 【執筆】

- 「身体性に基づいた人間科学に向かつて」 嶋田総太郎編『認知科学講座①：心と身体』所収 (pp. 231-264), 東京大学出版会, 2022年8月
- 「間身体性の観点から障害者スポーツを通じた「つながり」を考える」『スポーツ社会学研究』第30巻2号, 53-64ページ, 2022年9月
- 「呼吸法の学習過程についての考察——心因性の喘息を参考に考える」『人体科学』第31巻1号, 1-12ページ, 2022年8月 (共著: 謝淇榕・田中彰吾)
- 「間身体性から見た対面とオンラインの会話の質的差異」『こころの科学とエピステモロジー』第4号, 2-17ページ, 2022年6月 (共著: 田中彰吾・森直久)
- 「オンラインで他者とつながる時に大事なことは？」金子書房 note (特集「自己と他者: 異なる価値観への想像力」) <https://www.note.kanekoshobo.co.jp/n/n55d6eb1ff0ef>

#### 【報告・講演】(主なもの)

- 「あいだの一回性と規範性」, 日本現象学会 2022年度研究大会・ワークショップ「パフォーマンスの現象学」にて報告(オンライン開催) 2022年11月26日
- 「Embodied Cognitive Evolution behind the “Sapient Paradox”」, International Conference on Embodied Cognitive Science (ECogS 2022) にて講演 (Okinawa Institute of Science and Technology) 2022年11月9日
- 「現象学的認知科学の可能性」, 日本質的心理学会第19回大会・公募シンポジウム「現象学的人間科学の現段階」にて報告(愛知大学) 2022年10月30日
- 「身体性とナラティブから考える「生きにくさ」」, 第20回日本神経心理学療法学会学術大会・共催シンポジウムV「身体性変容から生きにくさを探る」にて報告(大阪国際会議場) 2022年10月16日
- 「On the spiritual dimension of embodied experiences」, Tokai University Online Symposium: Embodied Spirituality にて報告(オンライン開催) 2022年9月23日
- 「身体性認知科学のこれから——身体性からナラティブへ」, 日本認知科学会第39回大会・シンポジウム「心の科学の現在と未来を哲学者と一緒に展望する」にて報告(オンライン開催) 2022年9月8日
- 「Intercorporeality mediated by online meeting software」, International Human Science Research Conference 2022 にて研究発表 (Pace University, New York) 2022年6月14日

### 山本 和重

文学部歴史学科日本史専攻・教授

#### 【執筆】

- 「書評 高田雅史著『戦後日本の文化運動と歴史叙述 地域のなかの国民的歴史学運動』」(『図書新聞』第3543号、2022年5月13日)

#### 【報告】

- 「町村役場の動員業務—津久井郡青野原村役場の兵事書類から—」, 相武地域史研究会第4回シンポジウム「軍隊・戦争と地域社会—津久井・横浜・小田原—」, 東海大学湘南校舎, 2022年10月22日
- 「歴史学における身体性重視の系譜—柳田史学・国民的歴史学・社会史研究・オーラルヒストリー—」, 文明研究所シンポジウム「人文学における身体性をめぐって」, 東海大学湘南校舎, 2023年3月20日

#### 【その他の活動】

- 相武地域史研究会第4回シンポジウム「軍隊・戦争と地域社会—津久井・横浜・小田原—」(東海大学湘南校舎, 2022年10月22日)の企画
- 文明研究所シンポジウム「人文学における身体性をめぐって」(東海大学湘南校舎, 2023年3月20日)の企画

### 馬場 弘臣

教育開発研究センター・教授

#### 【執筆】

- 馬場弘臣監修・たこ乃部屋編『文化二年 小田原御家中御分限并御役付』, 94頁, 野の花出版社, 2022年12月

- 「俳優・緒形拳関係資料目録 その1」(東海大学文明研究所『文明』No.30, 2023年3月)

#### 【学会発表】

- 書評会：『近世地域史研究の模索—「つながり」の視点から』を読んで、小田原近世史研究会, 2022年10月2日
- 「講義型授業におけるオンデマンド授業の成果と課題」, 教育開発研究センター第7回教開発フォーラム, 2023年3月10日(金)

#### 【その他】

- 緒形拳アーカイブ・カフェ, 2022年10月8日・11月5日, 於: 東海大学

## 山花 京子

文化社会学部アジア学科・教授

#### 【執筆・翻訳】

- Kyoko Yamahana, "Historical consideration of Ancient Egyptian faience through a craftsman's point of view," Journal of the Ceramic Society of Japan 130 [8] 512-518 2022.08
- DOI <http://doi.org/10.2109/jcersj2.2206>, 2022.08
- 山花京子「第5章 X線CTスキャンで探るファイアンス製作の文化的記憶とその変容」、周藤芳幸編『古代地中海世界と文化的記憶』山川出版社 2022.06
- 山花京子「5001 レン・イケル立像部分・5005 礼拝形奉献碑・5008 トト神への奉献・5022 猫・5036 嘆く女神イシスまたはネフティス像・5040 花鳥文蓋付容器・5038 婦人肖像(ローマ属領時代)・6051 青銅刻線人物文鏡」大原美術館編集『大原美術館+ 作品151と建築』2022.04

#### 【報告・講演】

- 山花京子「文化財の調査修復のためのクラウドファンディングの適用について」日本文化財保存修復学会 第44回大会 ポスター発表 2022.06
- 山花京子「古代エジプトのファイアンス製作技法の解明：マンガン着色と焼成回数」日本西アジア考古学会 第27回総会・大会 口頭発表 2022.07
- 山花京子「遺物と科学」エジプト学若手研究者養成セミナー 講義 2022.09

#### 【その他の活動】

- 日本ガラス工芸学会 第60回 研究会「喜界島のガラス—城久(ぐすく)遺跡群出土のガラス玉—」企画・司会進行, 2022.07
- 東海大学グローバルフェスタ「今日は古代エジプト DAY！」ファイアンス制作WS 2022.10
- 工学部応用化学科秋山研究室共催(協賛「国際ガラス年2022」日本実行委員会)「アンデス先史文明の謎のガラス?? “アンデス玉”を再現しよう」2022.12
- 文明研究所・MNTC 共催「文化財の三次元計測ワークショップ スマホとPCで文化財の3Dモデルを構築」主宰 2022.12
- 文明研究所・MNTC・JST 創発的研究支援事業共催「文化財を科学する III」2023.01

## 篠原 聡

ティーチングクオリフィケーションセンター・准教授、松前記念館・マネージャー

#### 【執筆】

- 共著「特別企画 名作の彩り 移ろいの美—鎚木清方筆『美人画三部作』(『視覚障害』第410号、社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター、2022年7月)
- 「池永康晟さんのこと」(『紫陽花』第7号、美人画研究会、2022年12月)
- 「沁みる美人画『あわい』に身を委ねる触覚的感性」(『池永康晟画集3』角川書店、2023年2月)
- 「鎚木清方、生活を描く」(『現代の眼』第637号、独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館、2023年3月)
- 「鎚木清方が描いた子ども(作品解説)」(『鎚木清方記念美術館叢書23』鎌倉市鎚木清方記念美術館、2023年3月)
- 「平和への道 教育による人づくり」(『文明』第30号、東海大学文明研究所、2023年3月)
- 『かたちの生命 手の世界制作-3』図録(松前記念館、2023年3月)

#### 【報告・講演】

- 「彫刻を目と手で楽しもう！」(北区文化振興財団、2022年9月18日、23日)
- 『『笛吹きボトルWS+展示』実践報告』(ヴァンジ彫刻庭園美術館、2022年11月27日)ユニバーサル・ミュージアム研究会 研究発表

#### 【その他の活動】

- ともいきアートサポート事業（神奈川県との共同事業）  
平塚盲学校との連携による造形授業の実践（「創作×地域展示（平塚盲学校）」）  
伊勢原養護学校との連携による造形授業の実践（「創作×地域展示（伊勢原養護学校伊志田分教室）」）  
神奈川県立青少年センター及びランチ茅ヶ崎2での展示活動（「常設展示」）
- 「彫刻を触る☆体験ツアー」（松前記念館、2022年7月30日）
- 「心のかたち、きもちの塊」講師（グローバルフェスタ、松前記念館、2022年10月20日）
- 「彫刻を目と手で楽しもう！」講師（北区文化振興財団、2022年9月18日、23日）
- 「彫刻メンテナンス」講師（小田原市文化交流課、2022年11月20日）
- 「彫刻メンテナンス」講師（藤沢市、藤沢市アートスペース、2022年12月4日）
- 企画展「手の世界制作-3 かたちの生命」展（松前記念館、2023年3月）

## 吉田 晃章

文学部文明学科・准教授

#### 【執筆】

- 「土器にみられる布圧痕の分析と予備的考察—東海大学所蔵アンデス・コレクションのワウラ様式土器を事例にして」（共著）『古代アメリカ』第25号、古代アメリカ学会、2022年12月 pp.65-76
- 『東海大学文明研究所所蔵アンデス・コレクション土器資料 X線CTによる保存状況調査報告（2）』、2023年3月31日、文明研究所（3月末予定）
- 「伊勢原養護学校伊志田分教室の取り組み事例—笛吹きボトルの触察と制作、コレクションの活用をめぐる—」、『手の世界制作-3 かたちの生命』展図録、松前記念館、（3月末予定）
- 『古代アンデスの音とカタチ』展図録、松前記念館・文明研究所（3月末予定）

#### 【報告・講演】

- 「科学研究費新学術領域研究「出ユーラシアの統合的人類史学：文明創出メカニズムの解明」A02班 心・身体・社会をつなぐアート、科学研究費新学術領域研究 A02 班報告会、2022年11月7日。
- 「東海大学アンデス・コレクションの活用 笛吹きボトルワークショップから探るコレクション活用のあり方」、 「笛吹きボトルWS +展示」実践報告、ヴァンジ彫刻庭園美術館、ユニバーサル・ミュージアム研究会、2022年11月27日。
- 「X線CTによる笛吹きボトル土器の構造の分析」（共同発表）、古代アメリカ学会、第27回研究大会、2022年12月3日。
- 「古代アンデスの音とカタチ」、東海大学第4回スペイン・ラテンアメリカウィーク講演会、オンライン講演会、国際教育センター主催、12月8日。
- 「科学研究費新学術領域研究「出ユーラシアの統合的人類史学：文明創出メカニズムの解明」、科学研究費新学術領域研究全体報告会、ポスター発表、2023年1月。

#### 【その他の活動】

- 企画展「手の世界制作-2」展（松前記念館、2022年3月-4月）に出陳協力。
- 2024年度入学者向け研究紹介オンライン動画「中南米の古代文明-遺跡調査と遺物の分析」の撮影（夢ナビ）を、企画展「古代アンデスの音とカタチ」会場で実施、アンデス・コレクションと笛吹きボトル研究について紹介。
- ともいきアートサポート事業（神奈川県と松前記念館の共同事業）の「創作×地域展示（伊勢原養護学校石田文教室）」とコラボレーションし、「笛吹きボトルワークショップ」を実施（2022年6月6日、13日、7月4日）。初回、「アンデス文明と笛吹きボトル」について講義。
- ともいきアートサポート事業とコラボレーションし、筑波大学附属視覚特別支援学校で「笛吹きボトルワークショップ」を実施（2022年10月21日、28日、11月11日、2023年1月20日）。初回、「アンデス文明と笛吹きボトル」について講義。
- 松前記念館リニューアル企画展「古代アンデスの音とカタチ」展示責任者（2022年11月1日-）。
- 銀座ギャラリー青羅にて「触れるアート」展を開催。古代アンデスの笛吹きボトルの紹介と、ワークショップで筑波大学附属視覚特別支援学校児童によって制作された笛吹きボトルを展示。文明研究所共催（2023年1月22日-2月4日）。
- 企画展「手の世界制作-3」展（松前記念館、2023年3月-4月）、出陳協力。（予定）



東海大学文明研究所所報 2022

発行人 田中彰吾

発行日 2023年3月31日

発行所 東海大学文明研究所

神奈川県平塚市北金目 4-1-1 〒259-1292 tel.0463-58-1211 ext.3261・4426